北朝鮮拉致問題

210781188　大澤夏希

はじめに

ア）横田めぐみの母の訴え

a)日朝首脳会談の現状

b)「金正恩との対面の実現、子供の帰国」

イ）日本政府：日本人拉致問題を解決する必要性の提起

a)米国との調整

b)軍事力や経済力による圧力

c)国際社会との連携が不可欠

ウ）林芳正官房長官の訴え

a)拉致問題を含む北朝鮮への対応

b)政府一丸となって取り組む姿勢の表明

北朝鮮拉致問題について米朝関係に触れながら振り返る

第1章　拉致問題の歴史的背景

第1節　北朝鮮の成り立ち

1　日本の統治からの解放（1945年8月15日）

ア）米国の提案の承認

a)38度線を境に占領

b)南：米軍　北：ソ連

イ）政治犯の解放の実現

a)共産主義者

b)民族主義者代表「チョマンシク」

ウ）チョマンシクによる新しい建国準備の組織

第1節　北朝鮮の成り立ち

２　北朝鮮臨時人民委員会

ア）日時：1946年2月8日

委員長：金日成（キムイルソン）

イ）土地改革

a)ソ連占領軍の準備と金日成の個性の結びつき

ウ）司法制度の準備

a)裁判所と検察所の構成に関する原則の公布

第1節　北朝鮮の成り立ち

３　北朝鮮労働党の誕生

ア）日時：1946年7月

イ）スターリンとの会見（ソ連邦共産党の指導者）

a)金日成　b)朴憲永

ウ）合党大会

a)共産党と親民党の合同の提案

第2節　朝鮮戦争

1　朝鮮戦争

ア）北朝鮮軍の南進

a)1950年6月25日

b)6月23日、24日：北の人民軍の攻撃命令

c)6月25日：軍事行動

イ）決定的な反撃戦を発表

a)全面的な侵攻のくいとめ

b)ソウルの放棄、占領

ウ）さらなる南への進撃

a)人民委員会の復活　b)土地改革の実施　c）労働法令の実施

第2節　朝鮮戦争

２　国連安全保障理事会

ア）侵略行動と規定した速やかな撤兵の要求

a)加盟国による決議の実行

b)北朝鮮軍のさらなる攻撃

イ）トルーマン米大統領からの報告

a)マッカーサー：韓国軍崩壊の危機

b)李承晩：救助要請

ウ）北朝鮮軍への海空からの攻撃命令

第2節　朝鮮戦争

３　停戦協定

ア）1953年7月27日

イ）国連軍事司令官マーク・W・クラークと朝鮮人民軍最高司令官金日成の調印

翌日：中国人民志願軍事司令員彭徳懐の調印

ウ朝鮮を統一民族国家としての再建

a)民族主義者の願望の実現のための戦争

b)北の共産主義者、南の反共産主義者：失敗

c)米中戦争転化による引き分け

第3節　復興と社会主義化

１　復興

ア）国中の工場、発電所の破壊

イ）ソ連、東欧諸国：手厚い援助

ウ）ソ連：北朝鮮復興のための無償援助の決定

２　工業の復興

ア）農業での初歩的な共同化方策

イ）基本的工業施設の復興

ウ）農業協同化についての控えめな方

a)深刻な状況　b)穀物不足　c)食糧不足

第3節　復興と社会主義化

２　労働党大会

ア）日時：1961年9月

イ）金日成による「社会主義的改造の完成」の宣言

a)農業の強度組合化の完成の報告

b)手工業と資本主義的商工業の社会主義的改造の完成の報告

ウ）あらたな7か年計画の説明

a)満州派と甲山系による独占体制(党、政府、軍を統一的に指導）

b)1934年：北朝鮮における国家社会主義体制の成立

2章　拉致

第1節　拉致の発生と目的

1　拉致の発生

ア）久米裕の拉致【1977年9月19日】

a)旅館に同宿していた男の逮捕

b)1977年11月10日特定

c)密輸・スパイ事件

イ）横田めぐみの拉致【1977年11月15日】

a)行方不明事件としての報道

ウ）小住健蔵の拉致【1980年】

a)背乗り＝他人の戸籍やパスポートを入手し活動すること

b)朴を名乗る工作員による成りすまし

第1節　拉致の発生と目的

２　日本社会での報道

ア）大韓航空機爆発事件

a)1987年11月29日

b)「蜂谷真一」:死亡　「蜂谷真由美」＝北朝鮮工作員「金賢姫」

イ）李恩恵（リウネ）

a)日本語や日本の生活習慣の教育

b)田口八重子だと断定

第1節　拉致の発生と目的

３　拉致の目的

ア）工作員に仕立て上げるケース

a)蓮池夫妻、地村夫妻、市川修一、増元るみ子

イ）本人になりすます「背乗り」するケース

a)原勅晁

ウ）拉致した男性の結婚相手とするケース

a)被害者を工作員として養成

b)世界で活躍させる目的

c)日本語教師や通訳に従事

第2節　拉致被害者の真実

●1人目：久米裕【1977年9月19日】

「背乗り」のための拉致

●2人目：横田めぐみ【1977年11月15日】

拉致を試す試験的行為

●3人目：田口八重子（＝李恩恵）【1978年6月29日】

教育係として拉致

★4人目、5人目：地村保志、浜本富貴恵【1978年7月7日】

★6人目、7人目：蓮池薫、奥戸裕木子【1978年7月31日】

★8人目、9人目：市川修一、増元るみ子【1978年】

★10人目、11人目：曽我ひとみ、曽我ミヨシ【1978年】

➡★これら4組はアベック拉致（＝工作のために必要な人材を獲得し、教育し、工作員として養成）

第2節　拉致被害者の真実

●12人目、13人目：石岡亨、松木薫

北朝鮮側の説明：北朝鮮に興味を持ち滞在して働くことに同意

●14人目：原勅晁

工作員辛光洙によるなりすましのための拉致

●15人目：有本恵子

拉致してきた日本人男性と結婚させるための拉致

●16人目：田中実

日本政府によって認定、帰国拒否

●17人目：松本京子

北朝鮮➡入境せずと回答

第３節　「救う会」と救出活動

１　「救う会」の結成

ア）「横田めぐみさん拉致究明救出発起人会」の結成

a)１９９７年７月「被拉致日本人を救出する会」の発足

b)首都圏を中心とした支援のための会の発足

イ）「横田めぐみさん等拉致日本人救出の会」の結成

a)準備会としてスタート

b)５０万の署名を官邸に提出

ウ）拉致被害者を救うための市民グループの発足

a)１９９７年１０月４日　b)東京

第３節　「救う会」と救出活動

２「横田めぐみさんを救おう新潟の集い」

ア）新潟小学校体育館

a)１０００人の詰めかけ、５０人のボランティア

イ）北海道、九州、中国でのグループ結成の準備

a)北海道：１１月２７日、第１回の集会により結成

b)九州：準備会開催

ウ）「被拉致日本人を救出する会」

a)関東：１２月１３日

b)関西：１２月１８日

第３節　「救う会」と救出活動

３　小泉訪朝に繋がった経緯

ア）家族会代表による小泉純一郎宛の手紙

a)日米首脳会談で拉致問題を出す

b)総理自身が被害者家族と会う

イ）拉致議連

a)２００２年４月２５日

b)北朝鮮に拉致されたん本陣を早期に救出するために行動する議員連盟

ウ）「愛知の会」＝「愛知救う会」として正式に発足

a)茨城、広島「救う会」　b)山口「準備会」

第3章　小泉訪朝と被害者の帰国

第1節　小泉訪朝の背景

1　小泉訪朝実現の可能性

ア）日朝外務省局長級協議

a)2002年8月26日　b)平壌

イ）日本首相来朝を実現する動き

a)2002年から北朝鮮による積極的行動開始

ウ）北朝鮮による危機感の高揚

a)2001年1月ブッシュ政権発足

b)2001年9月米国同時多発テロ

イラン　イラク　北朝鮮＝「悪の枢軸」

第1節　小泉訪朝の背景

２　金正日の思惑

ア）日本の経済援助、現金の入手

a)食料の入手

b)エネルギー問題の解決

c)産業の立て直し

イ）ソ連の崩壊、貧困ロシアの援助＝不可能

ウ）北朝鮮にとっての新たな資金源

a)植民地支配の賠償

b)戦後補償

第1節　小泉訪朝の背景

３　日朝首脳会談直前

ア）金正日のインタビュー回答

a)日朝関係の正常化

b)両国間の善隣友好関係の発展

イ）小泉訪朝歓迎の表現

➡日本側からの謝罪、補償問題の解決

ウ）拉致問題＝大きくない問題

a)補償が先だという態度

b)交渉を少しでも優位に進めようとする北朝鮮側の思惑

第2節　第一次小泉訪朝

1　訪朝決定直後

ア）非公式の接触

a)日本側の主張：日本人拉致問題の解決

b)北朝鮮側の主張：過去の日本による植民地支配に対する謝罪と補償

イ）拉致被害者リストの譲渡

2　日朝首脳会談

ア）拉致と工作船問題の容認と謝罪➡日朝平壌宣言調印

イ）国交交渉再開の宣言

ウ）5人の帰国の実現

地村保志、浜本富貴恵、蓮池薫、奥戸裕木子、曽我ひとみ

第2節　第一次小泉訪朝

３　小泉訪朝の成果

ア）日朝平壌宣言の日本側の主張の取入れ

a)日韓条約方式＝日本側による有償･無償の経済協力

b)金正日による謝罪と再発防止の約束

イ）生存者5名の帰国の実現

a)2002年10月

b)一時帰国の約束の破棄＝永住帰国

c)国交交渉再開をしないとする態度

ウ）国交正常化への道の閉鎖

第3節　第二次小泉訪朝

１　小泉の再訪朝（2004年5月22日）

ア）北朝鮮側との交渉の本格化

→8人の家族を連れ戻すための折衝

イ）北朝鮮側の反対

a)小泉総理の押し切り

b)蓮池夫妻、地村夫妻の子供たちの帰国の確保

c)曽我瞳の家族の状況は不明

ウ）拉致被害者真相究明の見通しのつかない状況での訪朝

第3節　第二次小泉訪朝

２　第二次小泉訪朝

ア）チャールズ・ジェンキンス親子との対面

a)「一緒に帰国しましょう」と説得

b)米国軍隊を脱走、北朝鮮に亡命

c)脱走兵として裁かれる恐怖

イ）蓮池・地村両家の子供たちの帰国の実現

→小泉とともに帰国

ウ）ジェンキンス一家の帰国

a)インドネシアで再開　b)7月１８日　帰国実現

第3節　第二次小泉訪朝

３　訪朝の成果

ア）約束違反問題の解消

　　信頼の回復

イ）拉致被害者5人の永住帰国の容認

　　子供たちの来日・帰国の実現

ウ）安否不明の被害者

　　→「白紙で調査する」と約束

日本側による援助＝25万トンの食糧、1000万ドル相当の医療品支援の表明

第4章　拉致解決への道

第1節　六者協議

1　日朝交渉の停滞

ア）北朝鮮による核・ミサイル開発

イ）安倍首相による非難の声

ウ）日本政府による独自制裁

a)北朝鮮籍船の入港全面禁止

b)北朝鮮からの輸入全面禁止

c)北朝鮮籍者の入国禁止

圧力を強める日本に対する反発により日朝交渉停滞

第1節　六者協議

２　日朝交渉の再開

ア）2007年9月、安倍内閣退陣➡福田内閣発足

a)福田首相：被害者の帰国による拉致問題の進展を容認

段階的な制裁解除や支援の検討

b)「圧力」➡「対話」

イ）北朝鮮側の再調査に応じる姿勢

a)核実験の強行

ウ）六者協議によるエネルギー支援の合意(中国、北朝鮮、米国、韓国、日本、ロシア）

a)日本側：60日以内の核施設の稼働停止を要求

第1節　六者協議

３　公式協議

ア）日時：2008年6月　場所：北京

イ）北朝鮮側；拉致問題の再調査に合意

日本側：北朝鮮への制裁を一部緩和

a)北朝鮮による拉致被害者調査委員会の発足

➡日本による一部制裁解除

ウ）福田首相辞任による再調査中止

六者協議中断

第2節　安倍政権と日朝交渉

１　安倍政権の帰還

ア）2012年12月、自民党大勝

a)安倍による拉致被害者家族会メンバーとの対面

b)対話と圧力

イ）北朝鮮弾道ミサイル発射による国際社会の懸念

ウ）「国防委員会声明」による挑発

第2節　安倍政権と日朝交渉

ア）拉致問題解決を強調

a)ミサイル発射に伴う新たな独自制裁案の作成

b)拉致問題対策本部の刷新

c)実行犯の引き渡しの追加

イ）北朝鮮：3回目の核実験による挑発行動

目的：米国との直接交渉

第2節　安倍政権と日朝交渉

ア）安倍首相による圧力

a)遺骨問題、日本人妻問題の報告

b)拉致問題「調査中」　➡受け取り拒否

イ）在朝日本人についての調査報告の延期

ストックホルム解消

ウ）日朝関係＝対立と対決

第3節　米朝関係と日本

ア）2016年1月6日北朝鮮による第4回核実験

a)独自制裁の全面的復活

b)新規規制の決定　（再入国禁止、入港禁止）

イ）北朝鮮側：日本による「ストックホルム合意」の破棄

➡特別調査委員会の解体の表明

ウ）北朝鮮による核実験の繰り返し

a)米国と国連安保補償理事会による制裁の強化

第3節　米朝関係と日本

ア）2016年9月9日、北朝鮮による第5回核実験

a)砲兵部隊によっての実施を発表

砲兵部隊➡不測の事態、敵軍部隊の基地を攻撃する任務

イ）2017年9月3日、北朝鮮による第6回核実験

a)北朝鮮：「暴挙」

b)日米：「団結して対応

ウ）トランプの演説：北朝鮮の全的破滅

安倍の演説：米国の姿勢の支持

米国とともに行動するという決意の表明

第3節　米朝関係と日本

ア）首脳会談

　a)日時：2018年6月12日　場所：シンガポール

　b)トランプと金正恩

　c)米朝戦争回避の誓約

イ）トランプ：「朝鮮に安全の保障をあたえる」

　金正恩：「完全な非核化に向けたゆるぎない決心を再確認」

ウ）安倍の努力＝×

第3節　米朝関係と日本

ア）安倍の絶命

イ）岸田：「拉致被害者が帰国できるよう全力を尽くす」

　a)ブルーリボンバッジ＝救う会のバッジ「拉致被害者全員を帰せ」

ウ）北朝鮮側の主張

　a)核武装をしたうえで、日本が拉致問題についての考えを変えろという要求

　b)日朝関係改善を求める大局的な決断

　➡日本との国交正常化の望みの表明

帰国の実現がされない現状

終章　今後の展望

終章　今後の展望

1　非核化は実現しない（＝拉致問題は解決しない）

a)核戦力を手放さない考えの宣言

b)国連安保理による経済制裁の強化

c)一方的な核放棄は北朝鮮にとって不利

拉致問題は交渉材料

２　拉致問題は解決する

a)交渉による解決

b)交渉しない限り日本からの経済協力は得られない

c)抑止力の強化による交渉

終章　今後の展望

1　非核化は実現しない（＝拉致問題は解決しない）

a)核戦力を手放さない考えの宣言

b)国連安保理による経済制裁の強化

c)一方的な核放棄は北朝鮮にとって不利

拉致問題は交渉材料

２　拉致問題は解決する

a)交渉による解決

b)交渉しない限り日本からの経済協力は得られない

c)抑止力の強化による交渉

終章　今後の展望

- 非核化が実現する可能性はゼロに近い
- 交渉していかない限り経済協力は得られない
- 「交渉」の仕方によって解決に向かう